

馬先生のささやかな思い出

伊 坂 青 司（外国語学部）

馬先生が本学の特別招聘教授になられたのが二〇〇九年で、最初にお会いしたのはもうかなり前のことになります。あの優しい笑顔と物腰の柔らかさが第一印象として残りました。その後も何度か会議の前後に顔を合わせ、挨拶の言葉を交わすくらいでしたが、その最初の印象が変わることはありませんでした。

馬先生がお亡くなりになったことを知ったのは、一月の外国語学部教授会のちょっとした休憩時間に中国語学科の孫先生からでした。すでに副学長職から離れて学内情報に疎くなり、掲示板の計報を見る習慣のない私の不覚でした。その時の私には突然のことで、驚くとともにその時に脳裏に浮かんだのも、あの優しいお顔でした。私が二〇一六年度に一年間だけでしたが副学長を務めた折に、兼子学長を中心とした執行部の定例会議の席上で、馬先生のこと何度か話題に上りました。それは、神奈川大学と中国のいくつかの主要な大学との提携を図るうえで重要な役割を果たしていただいていること、また神奈川大学の上海事務所の開設にも尽力をいただいていることなどでした。兼子学長も馬先生の力を頼りにされ、またいろいろと配慮をされて、それに馬先生が信頼をもって応えられたものと、改めて感じている次第です。

一月九日の理事会の席上で、兼子学長から馬先生がお亡くなりになったことの報告がありました。また、馬先生が神奈川大学の上海事務所を立ち上げることができたことを最後に喜んでおられた、というご子息からのメッセージが紹介されました。馬先生はこれまで、日本と中国の相互理解と友好親善の促進で「外務大臣表彰」を授与され、また本学でも、中国を始めとするアジアからの留学生確保と国際交流の充実に尽力されてきました。そうした業績に加えて、神奈川大学上海事務所の開設は馬先生のご自身のなかで、自らに課した一つの大きな仕事として位置づけられていたことを、改めて感じました。その責務を果たすことができたという馬先生の想いが、人生を閉じられる最期の時間のなかで去来したのではないかと、ご子息からのメッセージを私なりに勝手に解釈しています。

神奈川大学がこれから国際化をよりいっそう進めるために、国際文化交流学科と歴史民俗資料学研究科を基礎に新学部を実現すること、そして国際系の学部を集約してみなとみらいキャンパスを開設することが具体的な日程に上りつつあります。そうした神奈川大学の国際化という未来にとって、海外に事務所を開設することは初めてのことであり、それがまた中国の上海であることは、馬先生のお力なしにはありえなかったものと思います。馬先生に心のなかで感謝を申し上げつつ、ご冥福をお祈りいたします。